

# ラオス天水田農村の人口増加と世帯の水田獲得の変化

## Changes of population growth and steps for getting rain-fed paddy fields by households in a rural village of Laos

高橋 眞一（新潟産業大学）

TAKAHASHI Shinichi (Niigata Sangyo University)

[takahasi@zau.att.ne.jp](mailto:takahasi@zau.att.ne.jp)

### 1 はじめに

いわゆる後発開発途上国（least developed countries）でも、最近は多くの国で死亡率低下とともに出生率低下によって人口増加率が低下している。特に、人口転換に関わるそれらの国の最近の出生率低下はどのような理由で生じたのかは重要な研究課題であろう。本報告は、かつては最貧国と呼ばれたラオスについて、その典型的生業の一つである天水田によって存続してきた農村を例にとり、生業変化と出生率低下のメカニズムを明らかにする試みの一つを紹介する。具体的には人口増加としての世帯数の増加（ここでは基本的に夫婦数の増加）と水田の開田、相続、購入・売却、人口移動の関係を中心に実態調査を通じてみることで、出生率低下の一つの要因として考えられる「人口圧力」の現実性について考えてみたい。

### 2 人口増加による生業や他の変化

生計の手段が天水田農業のような生業を主とした農村では、世帯単位の活動が基本であり、水田の面積が生存のための重要な指標になる。世帯員が増加すれば、世帯員一人あたり水田が減少し、それに対して何らかの対応が必要になる。最も現実的な対応は、未耕地の森林が多い場合、新たに開田することである。村周辺で未耕地が少なくなってくると、肥料の多投や田植え等の生産方法の変更による土地の集約化があるが、これには地域差がある。さらに、周辺農村から水田を購入することも考えられる。また、増加人口を吸収する他の方法は、近隣都市地域への通勤や国内外への一時的出稼ぎ的移動によって増加人口を村内にとどめることである。この村では1990年代以降のタイへの出稼ぎ移動がその役割を果たす。一方、増加人口を抑える典型的なものとして、都市や農村、あるいは国外への永住人口移動がある。さらに出生抑制によって人口増加そのものを抑制していくことが避妊の方法が得られる場合に考えられる。以上のような過程は実際にはいくつか同時並行的に進行し単純ではないと考えられる。ここでは天水田農村の実態から人口増加に対する世帯の生存のための対応を、世帯の世代ごとの変化を中心にみていく。

### 3 調査村の人口変化

まず調査村の人口変化をみておこう。第67回日本人口学会大会での報告「ラオス南部水田農村の人口動態率と国際人口移動」において、調査村（サワナケート県ソンコン郡K村）

の人口変化を明らかにした。村はおそらく 1920 年代に成立し、1940 年代まで他地域から移動してきた世帯が水田の開田を行った。若年人口の転入が主であったため、出生率は高く、死亡率が低いため、年平均人口増加率は当初 5%を超えたと推定される。その後、転入は少なくなったものの、年平均人口増加率は 2-3%の高い水準で推移した。1990 年代以降死亡率が低下し始め、その後出生率が著しく低下したため、人口増加率は急激に低下し、最近では人口増加がほとんどない状況になっている。1920 年代以降 1990 年代までの長期間、少なくとも年率 2-3%の高い人口増加率は、世帯単位でみた場合、世帯の生存子供数が親の世代に比べて平均して倍以上になっていることを示す。

#### 4 人口増加への対応

この村の著しい人口増加にたいして世帯はどのように対応したのであろうか。開墾による水田の拡大はおおよそ 1970 年代には終焉を迎えた。農業集約化については、この村では洪水時に排水のしにくい低位田と、干ばつ時に水が得られなくなる高位田の天水田であるため、リスクを考えると購入肥料の利用はあるもののそれほど進展しない。他地域への移動については、ラオスで中心部族のラオ族は妻方居住が中心で多くの男子は他地域農村へ移動するが、国内都市への男女の移動は都市の人口吸引力の弱さゆえに少ない。

世代ごとにみると、まず、第一世代夫婦は、主に 1910-30 年代に移住して最初に水田を開墾した。その子供の第二世代(主に 1940-60 年代結婚)は水田の相続が中心となる。

最も問題になる世代は第三世代(主に 1970-80 年代結婚)である。開田が終焉に向かう 1970 年代からタイへの出稼ぎ国際移動が顕著になってくる 1990 年代までに世帯を形成した世代である。この世代は人口増加によってまさに世帯あるいは夫婦数が増大した時期で、水田面積の増加の頭打ちの過程で、結果的には他の農村への移動が著しく増加した。また、水田の兄弟からのあるいは近隣農村からの購入が増加し始めた。一夫婦あたり水田面積は平均としては減少に向かうが、水田を 5ha 以上持つ層と 1ha 未満あるいは全く保有しない層の階層分化が次第に著しくなっていく。

第四世代(主に 1990-2000 年代結婚)は、引き続き人口増加が著しく、またタイ出稼ぎの影響が著しくなる世代で、水田購入が出稼ぎの資金による割合が大きくなっていく。一夫婦あたりの平均水田面積はさらに低下し、階層分化は依然存在する。離村は相対的には増加せず、出稼ぎによってむしろ村内に留まる夫婦が増加してくる。

これらの世代ごとの水田獲得や移動の変化の過程で、家族計画が 1990 年代に導入され一気に普及した。両者の関連をどのように位置づけることができるか、第一世代から第四世代に続く世帯の具体的事例を紹介しながら考えてみたい。

[本研究は JSPS 科研費 (JP25257004 研究代表者: 横山智) による成果である。]

表 世代別夫婦の水田獲得状況

	第1世代	第2世代	第3世代	第4世代
開田	13	12	5	0
相続	0	21	31	20
相続+購入	0	4	26	7
購入	0	1	9	8
相続無し	7	10	32	95
タイ出稼	0	0	12	80
離村	1	20	92	126
合計	21	68	195	256

注) 出稼ぎは相続無しの夫婦のみ。

資料) 村調査結果